
Seraphim Doll's Fetishism

伊吹 理緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Seraphim Doll's Fetishism

【Nコード】

N2256Z

【作者名】

伊吹 理緒

【あらすじ】

私立アザレア女学園。

そこは、清らかな風歌う内部進学式の宣教学校。

今年で十六歳の^{きしやうましる}微生真白は、両親の強い希望でその学園に外部編入する事になってしまう。

『パーフェクト・クレンリー
完全清潔淑女』

『セクシユアル・バーバジョン・ラベット
変態悶絶兎』

『バイオレント・レボリユーション
暴力革命』

右も左もわからぬ真白を待ち受けていたのは異様なあだ名で呼ばれる癖者だらけの天使達だった。

異様が異常を呼び、異質で異端な日々が真白を誘っていく。

——貴女が貴女のままでいられぬように、わたしがすべて壊してあげる——

思春期真っ只中の少女達のフェティシズム（禁断性愛）が発露する波瀾の学園ガールズラブストーリー、開幕。

この作品は以前投稿した同名作品を大幅に修正、加筆したものです。以前のものと設定等が所々違いますが、こちらが本筋となりますので、以前のものをお気に入り登録してくださいました方々には大変申し訳ありませんが、以前のものは削除させて頂きます。

Heartbeat Doll

「貴女は熾^{セラフイム}天使を宿した人形なのね」

幾億の星屑を躍らせる夜天を、少女は深遠な瞳で覗いている。

続く言葉は無く、追う音も無い。ただ天を仰ぎ、ただ星屑を覗く。鋭く伸びた月光は少女の髪に飲まれ地に落ちることができない。

真黒だった。

凜然たる背を這い、上腿まで到るその黒き細髪は、時折吹く無音の微風ですら大きく靡いていた。

ふわりと靡き、ゆらりと落ちる。

落ちるのは影。少女の影。月光の代わりに地に落ちる。影は落ちて広がり、闇になった。否、少女の髪自体が、地の闇なのかも知れない。

「……人形？」

闇に溶けようとしていた小さな光。それも少女だった。

闇が黒なら、光は白だった。黒髪の少女を見つめるのは白髪の少女だった。

黒髪靡く少女の背を、白髪靡く少女の瞳が見つめる。少女が、少女を——見つめている。

「……やっぱり、わたしは人形——なの？」

闇は答えない。

光は消えそうだった。

「……人間じゃ、ない？」

黒は応えない。

白は滲みそうだった。

「人形は、人間の傍に、わたし
あなたいられない？」

人間は喋らない。

人形は喋れなかった。

無音。

影が揺れた。

黒髪の少女がゆっくりと、振り返る。

「……私は」

微笑んでいた。

「貴女を愛している」

——どくん。

その日。

人形に、鼓動が生まれた。

? — Spring Breeze

微生真白は通学門を二歩進み、そこではたと気づいて踵を返した。一度内に潜った門を同じ歩数で外へと潜り、足を止め、真白は今し方歩いてきた路を見つめる。

路の向こうから幾人の少女が歩いてくる。

どれも知らぬ顔。

——おはようございます。

少女達は微笑みながら、門前の真白に朝の挨拶をして過ぎて行く。

——おはようございます。

真白は無表情に返す。少女達に挨拶されるたび、返す。

五回ほど繰り返した。

やはりどれも知らぬ顔。

知らぬのに微笑んでいる。

少女の波は門を抜け、学舎へ流れる。清らかな声と無垢な笑みが波に逆らう真白を飲もうとする。

——ああ、今日も、

また一人。また二人と波が来る。おはようございますと、ごきげんようと潮が鳴る。

——完璧だ。

真白は波に飲まれぬように前だけを見た。舗装された眼前の通学路。緩やかな勾配の下り坂。坂はだらだら延々に伸び、遙か彼方に県道が見える。

坂を上る少女達。波はまだ暫く続きそうだった。

真白は目を細め県道と坂が交差している遠景を見る。県道から坂へ吹き上がる風があった。

——いや、暴風かな。

今日も今日とて、と真白は失笑する。

「まあしろお！」

風が鳴いた。冷え張り詰めた空気が震え、路肩の草から朝露が落ちる。

少女だった。

少女の波をかき分け上る少女だった。

少女は坂を疾走する。両の足を力いっぱい躍動させどいてどいて、と少女の隙間を縫って行く。

少女が過ぎれば風が吹いた。

風は淑やかに歩んでいた少女達の着衣を乱す。

「きゃっ——」

黒いプリーツスカートがふわりと巻き上がり、白いセーラージャケットがひゅつと膨らむ。

「わはははは、ワタシは風より速いのだ！」

「ちょ、ちよつと詩尋^{しじゆん}さん危ないじゃない！」

危ないのは坂道での疾走の事か、はたまた崩された防壁の内のか。少女の一人が白肌を赤く染めて制する。だが止まらない。

「ゴールっ！ 坂道走記録更新！ —— つつても今まで記録した事ないけどね」

少女は坂を上り切り高らかに笑った。

「……おはよう、ほのちゃん」

門前に立つ真白は早朝から爽快な笑い声をあげる親友に声を掛ける。ほのはよっす、と短く澀瀬に返した。

「お待たせお待たせ。ワタシ今日は遅刻しなかったよ。あれだね、春だからだね」

ほのは逆立った栗色の短髪をごしごしと強引に撫でつけて、春は良い、などと呟き伸びをした。

「……春でも一昨日は遅刻した。ほのちゃんの遅刻常習は季節とか気温とかの影響じゃなくてただの怠慢だよ。精進しなさい」

「わはは、根に持ってる持ってる。一昨日はごめんって、けどさ律儀にワタシが来るまで待っててくれるのは有り難いんだけど、それは遅刻しない時間までにしてよ。遅刻したワタシを待って真白まで遅刻するとか、二重の責め苦だよ」

「……」

ほのが遅刻した日は真白も同じく遅刻する。遅刻すると言っても真白は毎日始業時刻の三十分前にはここに到着しているわけだからそれは遅刻ではない。だが二人はいつもここで待ち合わせして一緒に学舎へ向かう事になっているので、ほのが来なければ真白は門を潜り進む事が出来ないのだ。いくら早く学校の前に居たとしても、始業時刻に教室に居なければ問答無用に遅刻である。

一昨日も遅刻した。

真白はほのが来るまで絶対にここを動かない。

だから、ほのが遅刻した日は必ず真白も遅刻する。

「本当に、ナミダが出るほど嬉しいけどさ、そこまでして守るほどの約束じゃないよ。真白の家とワタシの家は離れてるから一緒に登校できないけど、ならせめてここから先は一緒に行こうって決めたけどさ、それは契約じゃなくて約束なわけだ。契約は破れば何かしらの罰が与えられるのが常だけど、約束ってのは友達が友達を思っ
て結ぶ決め事なんだから、友達の為になる破り方なら破って良いんだよ。ワタシが遅刻するのは自業自得なわけで、先生に怒られるのは仕方ない。だけど遅刻してない真白が怒られるのは嫌だよ。その時点でこの約束は友達の為になってない。だから、そういう場合は何の気になしに破ってくれよ」

これも、約束だ。とほのは微笑んだ。

「……わかった。じゃあこれからはほのちゃんかわたしの為にならない二人の約束なら容赦なく破る^{クリア}ね。手始めに、宿題を写させてあげるって約束もほのちゃんの為にならないので今日限り止めます」

「——ケースバイケース！」

「うふふ、だめ」

坂を上る最後の波が二人の横を過ぎ通学門を潜った。

「さて、ワタシ達も行きますか」

時刻は八時十五分。始業時刻まであと十分だった。
真白は小さく頷いて歩き出す。

「あ、そういえばわたし今日考え事してて、気づいたら門を潜ったの」

直ぐに気づいて踵を返したんだけど、と真白は続ける。

「お？ そうなの？ 何々、真白が夢中になるほどの考え事って何なのさ」

「……うん、わかんない」

「何じゃそりゃ」

寝ぼけてたんじゃないの、とほのは笑った。

「いや、寝ぼけては無いけど……だめ、思い出せない」

やっぱり寝ぼけてるのかも知れないと、真白は頭を振るった。

「ま、思い出したら教えてよ」

「……うん」

風が吹く。

柔らかで、清らかな春の風。

「さて、今日も今日とて、信仰厚く行きますか！」

「うふふ、そんな軽口だと怒られちゃうよ？」

大丈夫大丈夫、愛があればすべて許されるから。と言ってほのは

軽快な歩調で門を潜った。

春風を背に感じながら、真白も続く。
間もなく終る四月の風だった。

? | b r o w n s t u d y

闇だ。

真黒な闇だ。

右も左も手前も奥も何も無い。

いや、闇が在る。真黒い色が其処に在る。

どこまで在るのだろう、どこで終るのだろう。

何も見えない。黒しか見えない。見えなければ観測出来ない。終わりが在るのかわからない。

音は、音は聞こえる。

—— 衣擦れの音。誰かが小さく動いたのだ。

—— 風の音。先程まで身体を撫でてた春の風。今は遠い。

—— 呼吸の音。吐き出す息すらきつと清い。

そして、

—— 心臓の音。

ああ、聞こえる。確かに聞こえる。

鼓動だ。

これは自分の音だ。他の誰かの音ではない。自分だけの音だ。

確かに在る。

真黒な闇の中に、確かに在る。

見えなくても、視えないからといって、何も無いわけじゃない。きつと、この黒の中には自分が在る。

他の誰でもない、自分自身が其処に在る。

黒を見つめ、闇と知覚し、其処へ自分を映す。意識が闇へ滲み、深層に在るべき見知らぬ自分^{ほんもの}が千々の欠片とって現れる。

闇は鏡だった。

始めは何も無い。何も映らない。

次に音が聞こえる。いや、音を探すのだろう。見えなくて怖いから、怖くないと認める為に瞳の役目を耳に移して探すのだ。

其処が何処なのかを。

――怖くない。怖くない。

――其処は怖くない。

――音が在る。音が在るよ。

――怖くない。それは貴女の生きている音。

――聞こえる。聞こえてる？

――鼓動だ。動いてる。確かに動いてる。

其処が怖くないとわかると、途端に闇は鏡に変わる。光無き不可視の世界に像が現れる。

其れは心と呼ぶものか。

誰かが心と呼んだのだ。

心は形が無いらしい。

心は誰にも見えないらしい。

だが闇は心を映すのだ。欠片と成して次々自分に見せるのだ。

映る。居る。在る。

――にせもの自分を見つめるほんもの自分が。

ああ、知っている。貴女の名を。

心など借り物の名。

だがどうか、本当の名を呼ばせないでほしい。

このまま静かに眠っていてほしい。

眠っていれば其処は闇なのだ。只の真黒い闇なのだ。

――。

ええ、おやすみなさい。

願わくば、

永久とわに。

――始業のチャイムが鳴った。

真白は瞳を開く。

其処に闇は無くなっていた。

「……はい、宜しいですよ。皆さん目を開けて黙想を終えてください」

女教師は温和な表情を端から端へ向ける。反応する様に次々と生徒達は闇から帰って来た。

「では授業を始めましょう」

がさがさと、生徒達はそれまでの禁則的沈黙を破り、それぞれが机の上に教科書やらノートやらを音を立て置き始める。真白も続く。真白はふと教室を見渡した。皆の表情が気になったのだ。

始業前の黙想。毎朝の日課。黙し、自身の内へ沈み何を見たのか。それが気になった。

窓際、前列に定められた自分の席なら全てが見れる。

皆、清々としていた。

決して闇に落ちた者の表情ではなかった。

—— やっぱり。

落ちたる背徳者など居やしない。真白は教卓で教科書を開く女教師へ視界を戻す。

信ずるものは何なのか。

それが真白と少女達を分かつ境界なのだ。境界は身体の距離を分かつ事は無いが、心の距離を確実に分かつ。真白と少女達の距離は余りにも近く、遥かに遠い。

黙想とは自身の内に在る信仰と触れる儀式。

少女達は目蓋の裏のあの闇に、光を見たのだ。深層から滲み、浮き出たものは心ではなく信仰ほんものなのだ。

怖くなった。

本当はわかっていたのだ。表情など見なくても、あの闇に怯える

者などこの場所にはいない。端からわかっていた。だが、それでも少しは期待した。自分と同じ様に、闇を、あの鏡を、不可視の像を、怯え畏怖する者が居るのではないかと。

だが背徳者は一人だけ。

怖くなった。日々の默想が、怖い。自分は毎日、たった一人だけであの闇と向かい合うのかと思うと寒気がした。

窓から差す輝ける陽光は目蓋の裏には届かない。いや、届かないからこそ目蓋の裏に闇が出来るのか。真白は窓の向こうの光を見た。光が在ればこそその闇。昼が在ればこそその夜。太陽が在ればこそその月。

——対か、それとも一体か。

——どちらにしても、

自分と少女達はどちらにもなれない。と思う。

しかしそれでも、この三年間を何とかやり過ごさなければならぬ。もう逃れられないのだから。

光が闇か。自分がどちらに溶けるのか。わからないが今は前を向こうと思う。進む事しか自分には許されていないから。それに、今は授業中だ。

真白は窓に閉じられた外の世界から視線を戻す。

だが、刹那。素早く横に流れた世界に、映った。

——ああ、闇だ。

——真黒い、闇だ。

真白は再び外を見る。

大きなグラウンド。その向こうの正門を見る。

門を潜る闇が在った。

少女だ。

真黒な長髪を揺らし歩む、少女だ。

闇は少女だった。

少女は細くすらりと伸びた肢体をその長き黒に隠し、悠然と学舎へ進む。

真白は意識を完全に奪われていた。少女を、闇を食い入る様に見つめる。

——貴女は、

少女が近づいてくる。その顔が、闇から覗く顔が、見えた。

——貴女は、人間なの？

闇を添えた少女の肌は光の様な白さだった。肌が目が眉が鼻が唇が、少女の顔を作る全てが——美しかった。少女の姿は、在り得ぬ程に美しく、それはまるで人形の様に完全だった。

少女は少女を見つめる真白には気づかず、悠然たるまま学舎の方へ姿を消した。

真白は少女が消えてからも動けなかった。いや、動きたくなかった。動けば少女が、あの闇が、白昼夢に成りそうだったから。確かに在った。少女は確かに在ったのだ。

真白は、瞳を閉じた。

目蓋の裏には闇が在る。

真黒な闇の中に、確かに在る。

それは自分ではない。

他の誰でもない、あの少女が其処に在る。

真白は黙し、再び闇を想った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2256z/>

Seraphim Doll's Fetishism

2011年12月10日20時56分発行